

## 「総合的な学習の時間」の一環としての学習旅行

— テーマ学習の深化と成果の共有 —

School Excurion as a Part of Integrated Studies

— Sharing of Deepening and Accomplishment of Theme Studies —

青山久美子 高崎 朋彦 藤野 敦 若宮 知佐

### 〈要旨〉

本校では学習旅行（修学旅行）を「総合的な学習の時間」の一環として捉え、生徒たちが各自テーマ学習を推進していくことを学習旅行の軸としている。そのような取り組みについて、56期生での実践例をご報告したい。まず、学習旅行をどう運営したかについて概観したうえで、「総合的な学習の時間」全体の流れの中に学習旅行を位置づけ、最後に、学習内容を友人たちと共有し深化させていったプロセスについてご紹介する。

〈キーワード〉 学習旅行 テーマ学習 フィールドワーク 共有 ホームページ

### 1 学習旅行について

#### 1-1 56期学習旅行の概要

2010年11月8日～12日、本校2学年（56期生）は、関西（京都、神戸、広島）方面、北九州（長崎、佐賀、福岡、山口）方面、南九州（鹿児島、種子島、屋久島）方面の「3方面7コース」で学習（修学）旅行を実施した（本稿では関西・北九州・南九州の各地域を「方面」と示し、またその方面内で調査地域に応じて異なる宿泊地をもって設置されたルートを「コース」と示す）。

方面	コース	生徒	引率	宿泊地
関西	A-1	122	4	京都-京都-神戸-広島
	A-2	45	2	京都-京都-広島-神戸
北九州	B-1	23	2	長崎-熊本-別府-博多
	B-2	49	2	長崎-博多-萩-博多
南九州	C-1	33	2	指宿-屋久島-屋久島-鹿児島
	C-2	44	2	指宿-種子島-種子島-鹿児島
	C-3	39	2	指宿-鹿児島-湯ノ尻-鹿児島

#### 1-2 56期学習旅行の理念・方針

本校学習旅行（修学旅行）は、フィールドワークを活動の軸とした長年に渡る蓄積が存在する。京都・奈良を中心とした関西地域での長年の実践から、2000年よりフィールドの拡大・多様化がはじまり、2004年にはタイ国、2005年には韓国・沖縄・関西三方面よりの選択型、2006年は沖縄本島・石垣島・宮古島よりの選択型、2007年の北九州など様々な試みが行われて来た。これらは「総合的な学習の時間」の導入とともに、年度ごと

にそれとの関係にも試行錯誤がおこなわれてきたが、基本的には学習旅行におけるフィールドワーク活動の充実を軸とした事前・事後の様々な学習・活動が実施されてきた。

また本稿の主題となる「テーマ学習の深化と成果の共有」については、本稿紀要「沖縄方面学習（修学）旅行と総合学習の取り組み—個人テーマ学習と成果の共有—」（東京学芸大学附属高校紀要45 2007年）が直接的な先行研究となる。そこでは以下の項目で検討がおこなわれている。

#### ①個人・グループ・学年全体の有機的な学習

- a：学年全体の共有知識の底上げ
- b：個人の学習テーマの深化
- c：個人テーマとグループ行動の有機的関連

#### ②個人研究における問題意識の明確化

①で示した学習テーマの明確化と知識の深化のために、様々な分野、視点による講座形式の学習の場の設定。

#### ③共同研究としての学習過程における成果の共有の視点

特に②の講座形式の学習の場の設定については、その後も各年度の「総合的な学習の時間」の実践蓄積に結びつき、学校全体の教員間に一定のコンセンサスが生じ実施運用されていると考えられる。また、①③については基本的には教員・生徒間のコミュニケーションを主としてその質的な向上をめざしてきた。今回56期では、それらの情報環境を利用することで、その作成過程から生徒が相互に成果の共有・還元ができる方法を工夫することでその目的を達することを企画した。

### 1-3 活動概略

#### 1-3-1 学年発足当初(1年次)

学習計画作成に先立ち、学年団として学習旅行の目的・指導の指標として次の2点を確認した。「各自の興味関心に基づき設定した課題を現地で調査研究することで、自己と社会・環境への理解を深める。」「自主的な活動力の育成を自覚し、学習・行動計画及び活動をおこなう。」さらに具体的な活動を想定し以下の3点の目標を確認した。

- 1、日常の教科学習を越えた多岐にわたる分野からの学習を通し、広い視野に立って、自ら課題を設定し、問題を解決できる力を身につける。
- 2、訪問地の現地調査によって、生活や現実と学問研究の関わりの重要性を学び、文献調査とフィールドワークを合わせた学習への取り組み姿勢・能力を身につける。
- 3、訪問先における地域の人々との交流体験を通して、様々な文化を実感し理解する。

#### 1-3-2 基本となるコース概略の策定

##### —担当教員の学習旅行運営上の検討事項—

先行の成果と課題をふまえ、担当者が学習旅行実施の運営を進めていく上で重要視したのは、個人研究の成果と共同研究としての成果をより相乗効果的に進める方法、生徒の興味関心を促し多様な分野の選択を可能とするコース設定の実現という、ふたつの軸である。特に後者を促すためにより幅広いテーマ設定を可能とすることを目的とし、「関西」「北九州」「南九州」の3方面での実施が提案された。

コースを決定する前提として、教員の学習旅行担当者が1年次6月に行った会議において、以下のような観点から議論が行われた。ここでの論点は3つの地域で実施される学習旅行において、共通の理念、共通の目標を如何に掲げて運営を行うことができるのかという点であった。資料1は当初の担当者会議の資料の一部である。

##### 資料1 担当者会議(2009年6月1日)

##### 「コース設定に際して」

共通テーマのキーワードをどのように設定するか。

(例：時間・地域・境界・国境・異文化・接点・時代の最前線・最先端技術)

##### 【共通の学習内容(候補)】

・平和学習(関西：広島、北九州：長崎、南九州：知覧)

- ・環境(関西：琵琶湖、北九州：諫早、南九州：水俣)
- ・自然
- ・国際(奈良、対馬、長崎、種子島など)

##### 【共通の目的】

目的①成長過程としてどのような認識あるいは発想、態度の育成を求めるのか。(問題抽出・自分を深めていく行動・問題意識) <調べる→興味・関心(課題設定1)→調べる→深める(課題設定2)→調べる…>

目的②具体的な活動を通じてどのような成果を習得させるのか。

学問最先端の研究現場・施設(発掘、ロケット、〇〇技術)なぜその地域であるか、地域から全体の相対化、研究が現実の中にどのように根付いているか

→提示側の学習必要

この会議では、教員側からこの行事を通じて共通学習事項として生徒に学んでもらいたことと、生徒個々の興味関心に基づいた活動を、どのように有機的な連関性を作り構築していくべきかを検討課題としている。その後、「共通の学習内容(候補)」のうち、平和学習を全生徒が経験する学習とし、環境や自然などのテーマは各方面に設定された「学校設定コース」に取り入れていった。また、生徒の個々の関心に基づく研究テーマとして掲げる内容の平均的な水準を高めるために、教員集団が具体的な事例を、一定程度に研究・提案し、要求水準を明確にした上で生徒個々のテーマ活動に進むことが確認されている。

その上で、旅行会社に対して、幅広い分野の研究テーマが設定できる様なサンプルコースを作ることを要求し、検討を進めた。その結果、フィールドワークを可能とする仮コースを各方面ごとに5~7個設定し、生徒を含めた実際のコース作成作業に入った。

#### 1-3-3 生徒の活動(1)〈地域への興味・関心の拡大〉

##### 1年1学期

・関西・北九州・南九州方面実施決定。旅行委員の方面担当決定。

##### 1年2学期

・旅行委員会による「3方面(関西・北九州・南九州)プレゼンテーション」(地域で可能な調査例などを提示、生徒個々に活動のイメージ構築を目的)

・各生徒に方面(関西・北九州・南九州)選択アンケート実施

冬期休業文献レポート2冊課題(PDF提出)

### 1年3学期文献レポートの活用

1年次の活動は訪問地域への興味・関心を拡大した上で、自らの研究テーマの設定に導く過程である。そのような観点から、冬期休業中には生徒が行き先として選んだ方面について、関連する書籍を2冊レポートする課題を設定した。内容は「文献レポート2冊、ワードA4用紙雛形提示。著者名、書名、出版社名、発行年。要約文とキーワード問題点・課題を箇条書きで列挙する」とし、「PDFに変換し教室内のパソコンへ」提出とした。この時期は生徒の地域に対する認識もまだ漠然としたイメージである。そのような状況で書籍を選択しているため、選んだ書物が必ずしも自らの研究に結びつくとは限らない。しかし、関西、南九州、北九州のそれぞれの地域についての多岐にわたる文献内容が集積される。その成果を共有し、その後の興味関心に関わる文献検索を拡大することを目的とし、提出後は学年のHP「56期のページ」にアップし、インデックス作成の上、レポートをリンクさせ、相互に閲覧可能とした(項3参照)。

#### 1-3-4 生徒の活動(2)〈個人研究テーマの設定へ〉

春期休業中 個人の研究テーマ案の作成

2年1学期〈班編制・コースの設定〉

・4月 テーマ関連選択式の講座開始(9月まで。「総合的な学習の時間」項参照)

コース別参考文献書籍棚を設置

班の編成(テーマの共通性を優先的に設定)

・5月 コース別共通スケジュールの確定・告知、班別行動部分の行動計画相談

・6月 各班の活動予定表作成・提出  
第1回旅行業者と各班の直接相談会

・7月 各班スケジュール完成、提出  
第2回旅行業者と各班の直接相談会  
行程の確認相談

2年1学期は、生徒個人の研究テーマに沿って、班編制、コース設定を行うことが中心となった。まず春期休業課題として「研究仮題名(副題可)、研究概要、新たに読んだ文献の書名等のデータ、調査方法、調査訪問候補地」を内容とする研究テーマ提出を課し、具体的にどのような調査が可能かを考えさせることとした。4月にはこの研究テーマを基本に班編制をおこなった。コース記号A-1～C-3(本節冒頭部参照)と自身で設定した研究テーマを3つの研究カテゴリーに分類した。研究分類は社会(例:原爆認定訴訟・屋久島の地域経済・京

都の地域社会など)、環境(鞆の浦の景観保存・琵琶湖の自然保護・屋久島の植生など)、文化(西陣織・阿修羅像・有田焼・隠れキリシタン・言語など)とした。班分けはコースと研究分類で集合し(たとえば「A-1コースの文化」「C-3コースの環境」など)、7コース×3研究分類の21の小集団を作り、基本的にはその中で「研究テーマが近い」「調査地が重なるあるいは近い」などを基本として4人程度の班を編制した。集団は均等ではないので難航したグループもあったが、原則的にはこのような研究テーマを基本とした班編制を行い、それぞれの班のコース設定へと進んだ。その後、各自が班員と計画を相談する中で、個人の研究計画と他の班員の希望のすりあわせ、訪問地での交通手段や見学可能時間など様々な制約に気づき予定を変更したり、業者との相談の中で現実的なコース設定をおこなった。

#### 1-3-5 生徒の活動(3)

〈班活動から個人のテーマに再還元〉

夏期休業 課題 個人研究計画書作成

2年2学期

- ・9月個人行程表の作成(5日間の個人の行程表を作成)→各自のしおりに添付する形式
- ・11月学習旅行の実施 旅行中の記録(旅行記をスケッチブックへ)
- ・12月旅行記の提出

1学期に確定したコースをふまえ、再び自身の研究テーマとの調整をおこない、より具体的な研究計画を確認した。夏期休業中課題として個人の研究計画書を再度詳細に策定し、「研究題目・キーワード・研究概要(要旨・論文想定)の章立て」・今後の課題(旅行中におこなう調査予定・方法など)を記述・提出した。旅行中の記録は各自にスケッチブックを配布し、スクラップ、イラストを含め自由なレイアウトで旅行の過程を記録することとした。

#### 1-3-6 生徒の活動(4)〈研究成果のまとめと共有〉

冬期休業 成果論文の作成

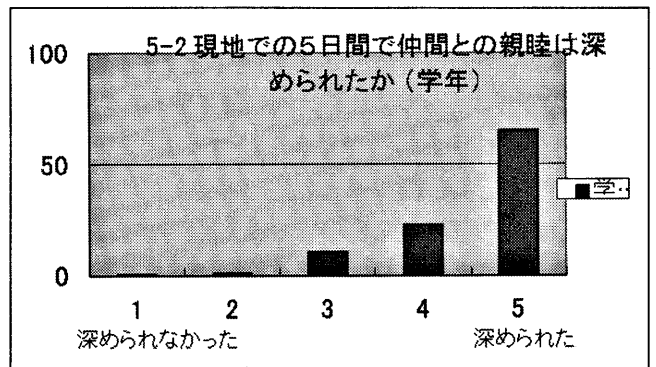
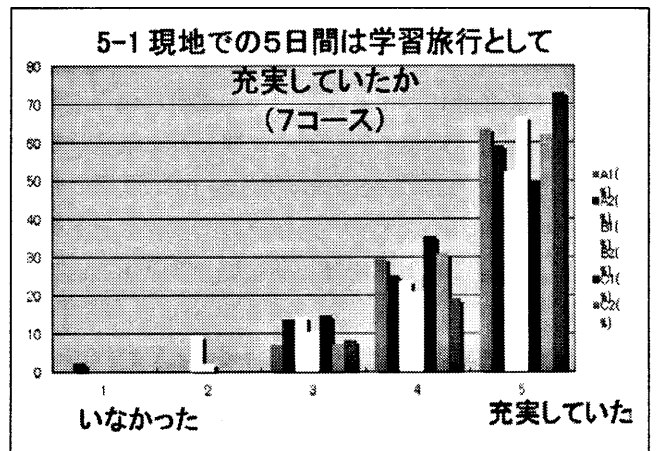
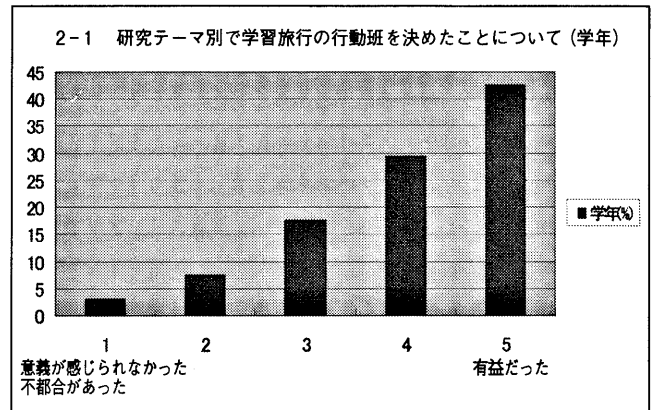
2年3学期

- ・論文要旨作成
- ・成果論文提出
- ・優秀論文発表会(1)クラス内で実施。各クラス7～8名。
- ・優秀論文発表会(2)学年全体、クラス代表1名ずつ。講堂に於いて学年全体で発表。

1-4 学習旅行後のアンケートから

今回の学習旅行では、研究テーマや興味・関心への多様性をより汲み上げるために、3方面7コースを展開したことが特徴的である。より細分化されたコース設定の中で、研究テーマ別に班編制をおこなったため、普通の学校生活では接点が少ない生徒どうしでのグループ設定が求められた。宿泊施設の部屋も翌日の行動の利便性を考え、基本的にはこの班を中心に決定した。そのため当初は納得できる班編制が可能であるか懸念されたが、【アンケート 2-1】では4分の3以上が「有益であった」「とても有益であった」となっている。もちろん、近い友人で近いテーマにエントリーして班編制に備えた生徒もいたが、テーマを基本とした班編制に予想以上に高い満足感を示した。これは今回の学習旅行に際し、生徒の意識の中で調査・研究の意義に一定の優先度が生じた結果と指摘できよう。本校生は元来学習意欲の高い生徒たちであるが、行事目的に対する姿勢をどのように事前の活動で生じさせるかが重要であろう。

【アンケート 5-1】はコース別に「充実度」「充実したという実感」を示したグラフである。全体的にコースによる極端な差異は抽出できないが、意外なことに、比較的全体行動での枠組みが時間的に大きく設定されていたコース（つまり自分たちでアレンジをする班行動を行う時間が少ないコース）が、「充実していた」とする肯定的な意見が多く見いだされる。アンケートの自由記述の項目にも「行程決定での試行錯誤が重く感じる」「行程の計画をゼロに近いところから作り上げることがたいへんだったという印象」「交通手段の手配、目的地までの時間が負担」というように、現地の交通事情に応じ班の行動計画をアレンジする等の作業が「効率が悪い」と意識される記述が目立った。これはこのような行事を実施していく上で大きな課題を提示していると考えられる。フィールドワークとしての研究や研究テーマの設定を標榜するのであれば、与えられた「見学」ではなく、調査方法の計画や手間のかかる調査への価値観を事前指導で高く意識させることは大切な課題とされるであろう。  
(藤野 敦)



## 2 「総合的な学習の時間」について

### 2-1 56期「総合的な学習の時間」の目標

新1年生の入学を目前にした平成21年3月、学習指導要領の理念をもとに学年の教員で話し合い、56期「総合的な学習の時間」の目標を次のように定めた。

- ・自ら課題を設定し問題を解決していくなかで、教科の学びによって得られた知見を自己において統合する力を養う。
- ・自己の生き方や進路について考えを深める。
- ・広く社会に目を向け、他者を理解し共感しようとする姿勢を養う。

高等学校での各教科の学びはそれぞれ専門的な領域にまで深まっていく。だが、日本の生徒たちは「何のためにそれを学ぶのか」という動機づけに薄いというPISA調査での結果が報告されている。56期生には、「総合的な学習の時間」で問題解決型の活動に取り組むなかで、各教科で学んだ内容を結びつけ、自分にとって意味のあるものへ昇華して行って欲しいと私たちは願った。また、それと表裏一体の作業として、自己理解を進め進路適性などに意識を高めるとともに、地域社会や日本、さらには世界へ向けるまなざしを持って欲しいと考えた。このように、自己理解／他者理解を進めつつ、教科での学習を自己の内部で統合し意義づけようとする56期「総合」の目標については、入学直後のオリエンテーションで生徒たちに伝え、三年間一貫性をもって指導できるようにした。

### 2-2 1年から3年次までの指導計画

本校では「総合」の単位を2年次に2単位、3年次に1単位置いている。したがって、1年生のときは時間割のなかに「総合」は無いわけだが、あくまで「総合的な学習の時間」は三年間通して取り組んでいくという考えのもと、以下のような三年間の指導計画を立てた。

平成21年度（1年次）目標：自己理解

- ・学習や活動の記録を『ノート2009』に記入する。
- ・教科のレポート課題や発表課題、読書、ボランティア活動に積極的に取り組む。
- ・冬休みに各自の研究テーマにそった文献2冊を読み、要旨／キーワードを56期ホームページで共有する。

平成22年度（2年次）

目標：他者理解、社会へのまなざし

- ・学習や活動の記録を『ノート2010』に記入する。
- ・学習旅行の個人テーマにそった調べ学習を進める。
- ・学習旅行でフィールドワークを行う。

- ・「総合的な学習の時間」の論文（作品）を作成し、成果を学年で共有する（発表会および56期HP）。
- ・進路講演会などでキャリアガイダンスを受ける。

平成23年度（3年次）

目標：自己理解／他者理解のうえでの進路実現

- ・自己の特性や関心の在りかを自覚したうえで進路選択を行う。
- ・担任との面談や学年担任団による進路相談会などを活用し、進路を実現していく。

### 2-3『ノート2009』と『ノート2010』

上記の指導計画にあるように、1年次と2年次には総合の『ノート』を生徒各自に持たせ、日々の学習や活動の記録を付けさせるようにした。『ノート』の書式はできるだけシンプルなものとし、「総合的な学習の時間」の活動記録のほかに、各自が「講演会の記録」「レポート作成の記録」「社会活動（ボランティア）の記録」「読書の記録」「新聞記事のスクラップ」を集積していくようになっている。また、巻末には学校全体の年間行事予定表と過去の卒業生の答辞の抜粋を載せ、自分の高校生活全体を俯瞰する意識を持てるようデザインした。

高校三年間を終えるときに、自分がどんな足跡をたどってきたのか、自分がどんな他者と出会い何を考えたのかを、このノートから振り返ることができるように、「自己のポートフォリオを作成する意識で」と生徒には繰り返し呼びかけた。また、学期ごとに担任が集めてコメントすることで取り組みへの意欲を保つようにもした。1年次の『ノート2009』と2年次の『ノート2010』から、いくつかの成果を次ページに掲載する。意義を認めることができた生徒は充実したノートを作りあげたが、充分な取り組みの見られなかった生徒もおり、どうしても個人差は見られた。しっかりと取り組んだ生徒は、自分の学習活動と社会の変動とを結びつける意識が持てたり、AO入試を受験する際に活用できたりといったメリットがあった。生徒たちの負担を増やすことなく、意欲的に取り組ませる方法については、今後さらに模索したい。

題名	
英文タイトル	
要旨 (300~400字)	
英文要旨	

提出：2011年 月 日

評価

学習旅行班編成&活動記録

方面/コース	
自分のテーマ	

班員			
組	番	氏名	個人テーマの概略

話し合いの記録

月 日 ( )

「総合的な学習の時間」個人研究

第1次申請	
テーマ (暫定)	形態
内容の概略	
研究の理由・ねらい	
問題点	

学習旅行の個人テーマと……同じ/違う(どちらかに○をつけてください)

中間報告	
テーマ (決定)	形態
研究内容	
今後の課題	

学習旅行の個人テーマと……同じ/違う(どちらかに○をつけてください)

レポート/発表の記録

	年 月 日 ( )
科目・場所など	
内容・自己評価・他者からの評価など	

	年 月 日 ( )
科目・場所など	
内容・自己評価・他者からの評価など	

	年 月 日 ( )
科目・場所など	
内容・自己評価・他者からの評価など	

<図1:『ノート2010』の書式より>

読書の記録

書名	作者	出版社	感想
1 理性の限界	高橋昌一郎	講談社	今までに興味のなかった論理学の面白さを知れた。
2 西洋哲学史一世代から中世	熊野礼彦	岩波書店	精細な記述・叙述のつらさに根柢と深い批判的究人の息を感じた。
3 科学論入門	佐々木カ	〃	科学が日本に流入し、時の経緯や西洋での進展がわかった。
4 三四郎	夏目漱石	新潮社	
5 知性の限界	高橋昌一郎	講談社	1.のシナズ。相変わらず面白い。
6 こころ	夏目漱石	新潮社	3度目だが、やっぱり楽しめた。現代文宿題。
7 数の概念	高木貞治	岩波書店	総合の講座に解説されて飛ばしたが、難解すぎて挫折。 未だにとる
8 山と溪谷	田宮重治	岩波書店	登山の黎明期特有の苦労があらわだった。
9 現代の古典解析	森毅	ちくま書房	ε-δ論法の帯がわかった。ただでも満足である。数のコンパクト性という概念がわからない。
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			

大学見学

東京大学 本郷 5/9 お祭り。物理学科の実験はよく見えた。  
 東京工業大学 大岡山キャンパス 10/24 工学のキャンパス印象  
 早稲田大学 理工 11/9 叔保は早稲田と違い落ち着いた感じ。  
 東京理科大学 理工 11/20 物理学科は生ははしゃいでいる。  
 うわついた空気。

講演会

平成基礎科学財団 科学教室 11/27 博井  
 「不確定性原理とめぐって」江沢洋  
 小柴先生、江沢先生と行った高知な先生にお会い。  
 お話でき、極めて光栄。内容は非常に難しかった。  
 高レベルの数学必要。大学生が多かったが、高校生  
 生でもやり合っている人がいて驚く。そして反省。若旦那。  
 自分の幼さに嫌気がさす。大学教員は高校の  
 指導要領など眼中にもない。精進の必要性。  
 (12/2 記す)

<図2:「ノート2010」生徒の記載例>

新聞記事のスクラップ

**脳死者の臓器提供  
判断する家族  
改正法も一緒**

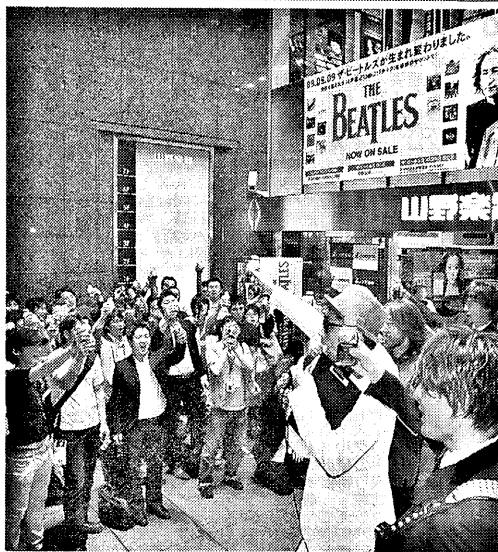
7月に本格施行される改正臓器移植法の運用を検討する厚生労働省の作業班（班長＝新美博文・明治大教授）は18日、脳死になった時に臓器を提供する意思が本人にあったかどうか不明な場合に、提供するかどうかに判断する家族の範囲を、配偶者、子、父母、孫、祖父母、同居の親族とすることに大筋で一致した。

現在は、本人が提供の意思を書面に残し、家族も同意すれば提供される。この日一致

**塚境が大事**

エーデンのシンポジウムで「遺伝子ドナーリング」に関する発言を発表。「遺伝的な情報を、選手の間接的差別に使わぬことを強く勧める」と

新聞記事のスクラップ



ビートルズ欲しい 深夜にファンの列

ビートルズのCDアルバムの音質を改善したリマスター盤が9日、世界同日発売となった＝写真、林敏行撮影。東京都内では、複数のレコード店が午前0時から特別販売を開始。銀座4丁目の山野楽器銀座本店の前には、販売前から約30人の熱心なファンたちの列ができた。

発売されたのは「ブリーズ・ブリーズ・ミー」（63年）から「レット・イット・ビー」（70年）までの全オリジナルアルバムなど。最新のデジタル処理で音質を向上させ、従来のアルバムに比べ、最も原音に近づいているという。同店では「ア・ハード・デイズ・ナイト」が大音量で鳴り響くと、販売を開始した。（宮本茂頼）

朝日

2009年9月9日(水)  
朝刊 35面

私はビートルズの楽曲の多様さが今なお人を引きつけるのだと思う。  
初期のアイドル時代の曲や中期のサイケデリックな曲もある。これらが生まれたのはやはり人の才能の高さによるものだと思う。  
やはりビートルズは良い。

＜図3：「ノート2009」生徒の記載例＞

朝日 2月19日 朝刊

私が昨年の現代文の授業から常々表明していることだが、脳死者の意思こそが臓器移植に関して最も尊重されて然るべきものだ。家族、親近者の意思は、ここにおいては何の重さも持たない。自分以外の人間の考えを容易々と慮ることはできず、脳死者もその簡単に他人の考えを自分の体のパーツに適用してはくならないはずだ。

記事にある子どもについてだが、ある程度の年齢になればきちんとした判断を下せるため、その年齢に達すれば親の考えは意味を減らさなくなる。しかし、まだ何も分からない子には親の考えが何から何まで適用されるべきだろう。



## 2-4 2年次の年間指導計画と評価

2年生になると時間割の中に「総合」が入ってくる。56期は金曜日の6限に「総合的な学習の時間」を置いた。7時間目がロングホームルームであるので、学習旅行直前に2時間連続の活動時間を取りたいときなどに便利であった。この「総合」の枠で、2年次「総合」の三本の柱、すなわち〈学習旅行のための準備〉、〈個人研究〉、〈進路ガイダンス〉を進めていった。年間の流れはおおよそ以下の通りである。

- 4月：年間のガイダンス、学習旅行行動班の編成
- 5月：「特別講座」第1回～第2回、進路講演会
- 6月：「特別講座」第3回、コース作成と業者相談会
- 9月：「特別講座」第4回～第5回、進路講演会
- 10月：「特別講座」第6回、3年次選択科目説明会
- 11月：学旅直前準備、学旅のまとめ  
(礼状、スケッチブックの完成、アンケートなど)
- 12月：「総合」論文(作品)の作成
- 1月：「総合」論文の提出、要旨まとめ、  
クラス内での発表会

- 2月：「総合」論文(作品)の学年発表会、相互評価
- 3月：2年次「総合」の振り返り

評価については、1学期は「取り組みの態度」と「ノート2010」、2学期は「ノート2010」と「学習旅行スケッチブック」、3学期は「総合論文/作品」に焦点化して、学期ごとに担任が評価を蓄積しておき、学年末に最終的な評価を文章で記すかたちとした。

## 2-5 56期「特別講座」の運営

前項の年間計画にあるように、金曜日6限の枠のなかで全6回の「特別講座」を開講した。これは、本校教諭および外部からお招きした方を講師として、学習旅行のフィールドにからんだテーマを中心とした67の講座を、生徒の受講希望に基づきプログラムしたものである(講座の一覧表は次ページ)。

56期の「特別講座」の特色を、4点挙げてみる。

- 1) 教科の専門性を生かして、一つのテーマに多様な切り口で講座が設定できた。例えば「原爆」というテーマに対し、物理学者である新田校長は「原子爆弾の物理学的考察」を行い、日本史の安井教諭はこの史代の漫画『夕凧の街桜の国』をテキストとして史的アプローチをした。また、国語科の鈴木教諭は原民喜『夏の花』などの原爆文学を取り上げる……というように複数の方向からの講座が成立した。
- 2) 外部講師の方に、専門性を生かした講座を開いてい

ただくことができた。このような取り組みは、過去の52期生・55期生で行った「土曜講座」の成果を引き継ぐものである。今年度は、早稲田大学教授浦野正樹氏に、「阪神大震災からの地域コミュニティ復興のプロセス」と題して神戸長田地区の復興について講演していただいたり、東京学芸大学名誉教授広井力氏に、「イサム・ノグチ」の平和彫刻群と日系米国人としてのアイデンティティについて貴重なお話をいただいた。また、北九州市観光課の上田ゆかり氏からは、「北九州エコタウン」について行政の立場からの講演を、東京学芸大学大学院生の齋藤和機氏には「陶磁器の歴史」について、貴重な現物を示しながらの講演をしていただいた。

- 3) 教科の異なる教員でチームを組んでおこなう講座が成立した。日本史の藤野教諭と美術の尾澤教諭のTTによる「平城遷都1300年祭記念 東大寺大仏その国際的背景と製造法」は、それぞれの専門を生かしながら東大寺大仏の成立に迫るもので、生徒の評判もたいへん高かったものである。
- 4) 学習旅行のフィールドには直接関係ないが、個人研究を論文に仕上げていく段階で必要な統計処理の方法や論文の書き方についての講座を開くことができた。これらは、講座としては地味だが、生徒たちが今後なんらかの研究活動を行っていくうえで糧となるものだと思う。今後は、国語科や数学科のカリキュラムと連動していけばさらに効果を挙げることができよう。また、51期以来継続して開講している「フィールドワークの進め方」も、本校の「総合特別講座」の特色となっている。(若宮知佐)

56期「総合的な学習の時間」特別講座

No.	講師(教科類)	講座名	備考	5月14日	5月21日	6月4日	9月10日	9月24日	10月8日	No.
1	松本 至巨	地域調査入門	必修	43名 地理教室	62名 地理教室	68名 地理教室	113名 講堂	88名 地理教室		1
2	坂井 英夫	「旅」の考え方			12名 化学実験室					2
3	宮城 政昭	異文化体験			15名 2C					3
4	宮城 政昭	日本の世界遺産		30名 2C						4
5	安井 崇	コンパクトデジカメで撮る旅の写真				47名 語学演習室				5
6	森棟 隆一	Excelで学ぶ統計処理1(平均～偏差値まで)		11名 視聴覚室						6
7	森棟 隆一	Excelで学ぶ統計処理2(分析ツールの使い方)						16名 視聴覚室		7
8	森棟 隆一	食から見る東西の比較			17名 2D	27名 2D	32名 2D			8
9	坂井 英夫	食べ物を科学しよう					27名 化学実験室	42名 化学実験室		9
10	浅田 孝紀	庭園鑑賞の基礎						28名 2F		10
11	廣瀬 和徳*	陶磁器の歴史						27名 2E		11
12	相慶 良謙	平和学習の視点からみる「ウルトラマン」		29名 2B	19名 2B	28名 2B				12
13	須藤 俊文	空から見る景色と航空機の科学		23名 地学実験室						13
14	新田 英雄	原子爆弾の物理学的考察				16名 2C				14
15	川角 博	原爆と核エネルギー(No.14とは量ならない内容)							32名 物理教室	15
16	古山 良平	広島と長崎ー原爆はなぜ日本に降とされたか					27名 2A	27名 2A		16
17	安井 崇	歴史と現在ーこうの史代『夕嵐の街 桜の国』を読む						4名 歴史教室		17
18	藤野 敦	広島・長崎からの平和(広島平和祈念公園祈願祭火事事件と大学生の活動)							32名 2D	18
19	鈴木 芳明	海外国から見た原爆 『アメリカ中の原爆被害』(戦後50年スリニオン原爆の歴史)		38名 2E						19
20	鈴木 芳明	原爆文学ー広島篇ー 原爆『夏の花』、大江健三郎『ヒロシマノート』など			8名 2E					20
21	若宮 知佐	子どもたちが見た原爆(長崎)ー『原子雲の下に生きて』を読む			7名 コンピュータ室					21
22	清野 正樹*	原爆大震災からの地域コミュニティ復興のプロセスー長田区伊賀地区の事例	A1必修			12名 講堂				22
23	若宮 知佐	震災後の神戸を歩くー村上春樹『辺境・近境』							14名 コンピュータ室	23
24	藤野 敦	古地図である京都・奈良					41名 歴史教室			24
25	安井 崇	古都京都の近代							48名 歴史教室	25
26	栗山 絵理	京都の地形図をじっくり見る講座		24名 2G						26
27	栗山 絵理	広島の地形図をじっくり見る講座				3名 2G				27
28	吉岡 雄一	阪急帝国を創った男・小林一三		6名 2D						28
29	平城通都1300年祭記念 東大寺大仏その国際的背景と製造法			23名 美術室						29
30	尾澤 勇	平城通都1300年祭記念 飛鳥・白鳳・天平の御霊・内裏の遺物					16名 美術室			30
31	尾澤 勇	南都六宗及び平安・鎌倉時代の仏教の主要本山について						16名 美術室		31
32	尾澤 勇	西日本の伝統産業及び工芸文化							14名 美術室	32
33	広井力*	日米米国人彫刻家サム・ノグチ氏の平和構築と彫刻・光の彫刻	A2必修			50名 会議室				33
34	末住正義*	近畿・中国・瀬戸内の城郭							11名 2G	34
35	宇佐見 尚子	歌舞伎・文楽の楽しみ							14名 2F	35
36	鈴木 芳明	在日文字ーつこうへい(福に福むが福) 金貨2円(在日という歴史)ー					2名 2E			36
37	吉岡 雄一	すしの歴史						20名 2D		37
38	青山・若宮	お好み焼きー広島風・関西風ー			25名 調理室		26名 調理室	25名 調理室		38
39	森棟 隆一	九州の水、関西の水							35名 2C	39
40	上田ゆかり*	北九州エコタウン	B2必修	39名 会議室						40
41	高崎 朋彦	九州の産業と文化ー長崎ー熊本ー大分ー福岡ー			20名 2F					41
42	高崎 朋彦	写真で巡る長崎市内ー異国文化と被爆の爪あとー		19名 2F						42
43	栗山 絵理	長崎の地形図をじっくり見る講座						14名 2G		43
44	坂井 英夫	長崎の歩き方			22名 2A					44
45	鈴木 幸	長崎をフィールドとしたテーマ(未定)					11名 2C			45
46	安井 崇	軍艦島の光と影ー軍艦島の歴史とそれを見る視線について			14名 2G					46
47	高崎 朋彦	キリシタン迫害と島原の乱				11名 2F				47
48	鈴木 芳明	菅原道真と筑紫歌壇、防人の歌				10名 2E				48
49	鈴木 芳明	九州にまつわる文字ー金貨(在日)、長崎山鏡(在日)、長崎山鏡(在日)ー							9名 2E	49
50	川角 博	宇宙開発					39名 物理教室			50
51	小境 久美子	歴久島・森と水		29名 2H						51
52	小境 久美子	コケ植物・シダ植物の生活環			22名 生物実験室					52
53	宮城 政昭	水銀を科学するー水俣病・大仏蓮立とのかかわりー				4名 化学実験室				53
54	福元 康貴	鹿児島弁で語ろう							33名 語学演習室	54
55	福元 康貴	謎の生物 “インシー” を探ろう		44名 2A	27名 2A					55
56	藤野 敦	高度成長と水俣病			6名 歴史教室					56
57	藤野 敦	幕末「貧乏」論争はなぜ主役になれたのかー幕末改革と幕末論ー			35名 歴史教室					57
58	安井 崇	鉄砲伝来とその背景					14名 2H			58
59	岸谷 正彦	数学の考え方とは			5名 2H					59
60	岸谷 正彦	数学の考え方ー整数論				8名 2H				60
61	岸谷 正彦	数学の考え方ー微分						15名 2H		61
62	岸谷 正彦	数学の考え方ー積分							11名 2H	62
63	相慶 良謙	「旅」まつり(自然博物館のよみか)から学ぶ。自然、環境、食、健康、経済……)	B3選修				9名 2B	9名 2B		63
64	相慶 良謙	和菓について(日本独自の数学を歴史をからめながら紹介していく)							15名 2B	64
65	宮城 政昭	ガラスを融かしてみれば							67名 化学実験室	65
66	宮城 政昭	自己理解と他者理解							43名 2C	66
67	若宮 知佐	論文の書き方	必修							67

使用教室に関して不都合がございましたらお知らせ下さい。  
生徒の確定人数と名票を来週早々にお渡しいたします。

### 3 成果の共有について

#### 3-1 ホームページの活用

本校の総合学習では、個人テーマの設定に際し、自由に決めさせている。また、2年次11月に実施される学習旅行において、フィールドワークを中心とする活動を通じ、総合学習とすることも出来るため、テーマの幅と種類は非常に広い。従って、参考文献の提示、進捗状況の確認、事務的な連絡の全てが、ホームルーム単位ではスムーズに行われず、一方でその都度どこかに集めるわけにもいかない、という問題に直面する。

そこで本校では、学年のホームページに、総合学習用のページを作り、参考文献、個人の研究テーマ、事務連絡などをそこで確認できるようにした。

#### 3-2 参考文献

本校では、1学年に約330名が在籍しており、56期生（平成21年入学）の場合、そのうち300名程度が学習旅行での訪問先と関連した研究テーマを設定した。56期生の学習旅行での訪問先は、関西、広島、九州地域で、その地域に関連した書籍を学年で購入し、教室前の廊下書庫に配置した。書籍は購入ごとに更新され、そのブックリストはホームページ上で確認できるようになっている。

No	文 献 名	出版社等	保管場所	対象コース								
				A1	A2	B1	B2	C1	C2	C3		
1	電車とバスでめぐる京都アタセス・ガイド10〜11年編	資料研究所	2Eラック	○	○							
2	電車とバスでめぐる京都アタセス・ガイド10〜11年編	資料研究所	2Eラック	○	○							
3	京都観光乗物ガイド 自主研発行	資料研究所	2Eラック	○	○							
4	京都観光乗物ガイド 自主研発行	資料研究所	2Eラック	○	○							
5	京都 観光 食べめぐり 物産館を求めて	京都府観光	2Eラック	○	○							
6	話を聞く 白旗の歴史	京都府観光	2Eラック	○	○							
7	京都観光案内	元村橋内書院	2Eラック	○	○							
8	たのカル 京都のお茶	JTBパブリッシング	2Eラック	○	○							
9	「平安朝」を歩く 清和、醍醐、鳥羽、白河門院	山と溪谷社	2Eラック	○	○							
10	京都・奈良・奈良自転車散歩	山と溪谷社	2Eラック	○	○							
11	文化で探る京都案内 そのほか、個人	京都新聞出版センター	2Eラック	○	○							
12	歩いて検定 京都学	山と溪谷社	2Eラック	○	○							
13	御膳運と平安京 宮内省の奥	集文社	2Eラック	○	○							
14	京都水ものがたり 平安京一二〇〇年を	集文社	2Eラック	○	○							
15	まち歩き京都 御幸旅行目録マップ	資料研究所	2Eラック	○	○							

#### 3-3 生徒によるレポート

先にも述べたように、生徒の研究分野とホームルームという単位が必ずしも一致していないため、中間報告などのレポートは担任や担当者ではなく、各自でホームページに提出する方法をとった。これにはいくつか工夫が必要で、以下にその点を紹介したい。

第一に、生徒が作成するファイルの種類である。ホー

ムページの作成に長けている生徒もいるが、閲覧するブラウザやOSの種類も様々なため、全員一律で使用するファイルをワードで作成し、各自がそのフォーマットに自分で入力し、最終的にできあがった文書をPDFとして保存し、指定のファイル名をつけたものを提出させた。本校で教室等に配置しているコンピュータは全てアップルのものである一方、生徒の多くは自宅でウィンドウズを使用しているが、PDFはOSとブラウザの種類にかかわらず閲覧可能である。

The screenshot shows a website titled "参考文献" (Bibliography). It contains several links for downloading files and accessing databases. Below the text are three navigation menus:

- クラス別 (1年次)**: A row of buttons for classes A through H.
- クラス別 (2年次)**: A row of buttons for classes A through H.
- 方面別**: A grid of buttons for regions: 関西方面 (A), 北九州方面 (B), and 南九州方面 (C). Each region has sub-buttons for specific courses (A1, A2, B1, B2, C1, C2, C3).

第二は提出させる場所である。当初は学校のホームページと同じ場所にリンク先を設定し、提出されたPDFファイルを担任がアップロードする方式をとっていた。しかしこの方法では、生徒が提出してから担任がアップロードするまでに時間がかかるほか、校内でしか閲覧できないという問題もあったため、提出専用のフォルダを外部にも公開しているサーバ内に作成し、そのアカウント情報（ログイン名とパスワード）を旅行委員に管理させる方法に変更した。これにより、担任は提出状況をホームページ上で確認できるほか、生徒は自宅でも他の生徒の研究テーマなどを閲覧することができ、フィールドワークグループの編成や、参考文献の選択など、長期休暇に課した作業も、学年の生徒全員が集まることなく実現できた。

参考文献(A組)		
NO	氏名	方面
A01	荒木 峰	A1
A02	泉田 音	C8
A03	猪俣 勇介	C8
A04	乙部 亮	A1
A05	高橋 大郎	A1
A06	川崎 和也	A1
A07	後藤 典喜	A1
A08	鶴山 繁樹	C8
A09	フルト	B2
A10	菅沼 重樹	A1
A11	杉野 航太	A1
A12	鈴木 泰介	A1
A13	高橋 真平	A1
A14	高木 将太	A1
A15	八谷 和哉	C2
A16	福原 幸高	B2
A17	星野 謙	A1
A18	本庄 一樹	A1
A19	森山 洋平	C2
A20	安川 亮	C2

第三に、生徒が提出する作品の自由度の高さが上げられる。56期生も文書によるものが多かったが、中には粘土による作品、自分で作曲した音楽、数人で共同制作した映像ファイルなど、最終的な作品の表現方法が多岐にわたる点である。しかしながらホームページへの提出であれば、写真や音楽、映像であっても収録可能である。従来は、報告集などを文書の形でまとめて最終報告の形をとってきたが、ホームページであれば、提出作品の表現形式、関連文書やウェブサイトのリンクの設定、保管上の問題など、これまで問題となってきた様々な問題を解決する一助になる。

### 3-4 今後の課題と展望

今回報告している方法でも、生徒の自宅にコンピュータがあること、ワープロソフトにある程度習熟していることが前提となっている。しかしながら、一人の生徒でもこの前提に当てはまらない場合、総合学習が授業として設定され、単位や評価に関わる以上、学校で体制を保証する必要がある。本校では、教室に配置したコンピュータに、前述したような問題をカバーできるように配慮した。また、情報科と協力し、ワープロソフトや表計算ソフトの基本的な操作を指導して頂き、PDFファイルの作成方法なども集会で紹介した。これら全ての手順は常に学年のホームページで紹介し、適宜画像やリンク、元となるファイルを提供することで実現していった。

他に問題点を挙げるとすれば、学校のホームページが

あり、それが課題等の提出先として利用可能かどうかという点である。本校ではホームページを管理する部署のほか、学年ごとにホームページを持っており、それぞれに、ある程度ホームページ作成の知識のある教員が配置されている。校内で使用しているサーバのセキュリティ上の特性や、生徒が作品等を提出する受け皿としてのホームページファイルを作成できるかどうか、今回紹介した方法の前提となっており、本校では年度末に全教員に実践例を紹介し、情報交換することで裾野を広げている。(高崎朋彦)